

平家物語に描かれた木曾義仲の人間像

武 久 堅

平家物語が木曾義仲の人間像をいかに描いたか。その分析を通して、この物語のもつ叙事詩的性格の特質を明らかにしたい。これがこの研究の主なる目的である。巻六にて初登場し、巻九の半ばにしてその首が都大路を渡される日まで、その間に物語は巻七平氏一門の都落を含めて、いわばそれは「平家」十二巻の圧倒的な中心部に位置すると考えられる。この中心部に位置して、義仲の人間像を形象化する方法は、戦記文芸として「平家」の一つの中世的到達点を示している。巻九において形成される抒情の質の転化を「平家」の叙事詩的性格の決定に積極的に参加する特質として重点的に取り扱うのもその故である。

以下この研究では、先ずその人間像を、外郭からの迫りと内面からの衝動との両の側面より究明して、一人の人間を支え上げる全体を明らかにし、かかる全体が顕現する形象を、いわゆる平家物語が秘める叙事詩的性格の特質として規定してゆきたいと思うのである。

註(1) 私がこの叙事詩的性格という用語を用いるとき高木市之助博士の「平家物語の叙事詩的関連」〔平家物語講座第一巻〕所

収)を念頭に置く。氏の論は、「順序としてまづ叙事詩とは何かといふ規定から入って、平家物語がそのやうな規定にどの程度合格するかという点に中心、少くとも重点」を置くのではなく、「平家が果して叙事詩であるかどうかということよりも、叙事詩の持つてゐるこのような強力な一つの意味へ平家物語をもつと直結すること」に現代の課題を見ようとするものである。氏は、叙事詩の強力な一つの意味を、古来西欧に於て叙事詩と呼ばれて来た一連の文学から「常に包括的で広汎な或る社会を直接に負ふてゐるところ」に求められる。私は同じ「強力な一つの意味」を英雄的人間像の造型の中に求める。いかに新しい詩質において一人の英雄像を創造しているか。抒情の質の転化は中古的物語から中世的叙事詩への展開にとつて不可欠の要素ではなからうか。

—

平家物語に描かれた義仲の人間像は、同じ「平家」の清盛像と比較するとき、かなり異質な特質をもつて形象化されている。誇張と戯画性をその特性とする陽性人間像から、英雄の物語の主人公へ——それは運命の子として、否定のエネルギーを内包し、行動が自らの存在を主張し、やがて行為が自らの存在に完結を与える、いわば英雄なる資質の悲劇を体得した人間像として造型されている。行為によつて自らの存在をあかしせねばならぬ運命の子とは何か。卷六に初登場する木曾義仲は次の如く語り出されている。

さる程に、其比信濃國に、木曾冠者義仲といふ源氏ありときこえけり。故六条判官爲義が次男、帶刀の先生義賢が子なり。父義賢は久壽二年八月十六日、鎌倉の悪源太義平が爲に誅せらる。其時義仲二歳なりしを、母なくなくかかへて信濃へこえ、木曾中三兼遠がもとにゆき、「是いかにもしてぞだてて、人になして見せ給へ」といひければ、兼遠うけとつて、かひがひしう廿余年養育す。やうやう長大するまゝに、ちからも世にすぐれてつよく、心もならびなく甲なりけり。(卷六「廻文」)

やや長文のこの義仲登場の部分を敢て引用したのは、実はこの発端の一文にすでに義仲の運命の暗示と圧縮を見出すために他ならない。ポイントは次の四点に指摘することが出来るよう。

- (1) 「源氏、ありときこえけり」が意味する源氏に生を受けたものとしての生涯。
- (2) 「父義賢は悪源、太義平が為に誅せらる」の内に秘められた運命の迫り。
- (3) 「母なくくかへて信濃へこへ」「ちからも世にすぐれてつよく心もならびなく甲なり」——この二句に約束される生育の場と天性の資質の数奇なめぐり合せ。
- (4) 「兼遠うけとってかひなくしう廿余年養育す」。ここに形成される乳母子との恩愛の絆。

義仲像の全貌は恐らくここに掲げた四項を母体として生成されてゆく。(1)・(2)を彼への外郭からの迫りとして捉え、(3)・(4)に彼の内的衝動のいわば生命とも呼ばれるべきものを確かめることが出来る。以下にこの(1)・(4)の各項を詳察することとする。

(1) 源氏に生を受けた者としての生涯。

東海に兵を起した頼朝の挙動を伝え聞いて、義仲は次のようにその意中を漏す。

「東山北陸両道をしたがへて今一日も先に平家をせめおとし、たとえば、日本國ふたりの將軍といはればや」(巻六「廻文」)

彼の源氏としての自覚と決意が最も素朴なあたりで吐露されたところと見ることが出来る。作者はこうした義仲の胎頭を語ってその末尾に「平家末になる折を得て源氏の年来の素懷をとげんとす」と結んでいるのであるが、平氏に真向うから対立して一つの共同体を成す源氏の嫡流として招喚されるところに、彼の存在意義のすべてがあったと云って過言であるまい。それは何の懷疑をもはさまれぬ運命共同体を意味する。源氏という氏名の故に、一切の困難も克服されたであろう。しかも義仲には、逆に『源氏』——この氏名こそすべてであったはずである。例えば寿永二年の

頼朝との間に発生した不和のもつ問題は、(2)においても触れられるが、この時義仲は、ただ素朴に、同じ源氏の武士ではないかという一点で事件を克服し得ると信じているのである。「なんの故に御辺と義仲と中をたがふて平家にわらわれんとは思ふべき」と彼が述べる言葉によって、その心境は明らかであろう。同じく、砥浪山々中で平家の大軍を迎え討つ合戦に際し、木間に八幡神社を見出し、大いに悦び、手書きの大夫房覚明に命じて早速と願書奉納を為す物語にも、名門氏族としての矜持が期せずして語られていると云えよう。乳母夫兼遠は、ただひたすら源氏の武士としての名を成さんがためにその成長に期待をかけ、この期待を背負った義仲の生涯には、かかる運命共同体への無償の信頼が、その外郭からなし崩しに崩されてゆく過程に、悲劇的人間像への緩やかな歩みの足跡が印されるのである。以下この運命共同体からの孤立の足跡を辿ろう。

頼朝と不仲に陥った十郎藏人行家が、義仲を頼って信濃に越えて来たとき、義仲は「義仲が許へおはしたるを義仲さへすげなうもてなし申さん事いかなぞや候へばうちつれ申たり。」と受け入れている。それは明らかに裏面で頼朝への距離を準備したのであるが、彼にはそうした背裏は一切問題とならない。しかもかかる行家もまた後年義仲における同族背反の一分子として立ち現れて来るのである。平家を追って備中国に西下する義仲を、京にあって行家は「やう／＼に讒奏」する。これを伝え聞く義仲は『やらば』とて夜を日についで馳上る」と記されている。「玉葉」はこの間の事状を詳細に記録している。⁽²⁾「平家物語」ではこの間の彼の心境を『さらば』に続く行動一点に集約する。素朴な信頼感がこうして無惨に裏切られてゆく。同じ頃、鎌倉にあって居ながら征夷大將軍の院宣を蒙る頼朝は、使者の左史生中原泰正に、言語も分明に左の如く語っている。

「平家、頼朝が威勢におそれて宮をおち、その跡に木曾の冠者、十郎藏人うちいりて、わが高名がほに官加階をおもふ様になり、おもふさまに国をきらひ申候奇怪也。」(卷八「征夷將軍院宣」)

しかもこのような事情も知らずに、法住寺を攻めて法皇を敵にまわす義仲は、「今度は義仲が最後の軍にてあらむずるぞ、頼朝が帰きかむ処もあり軍ようせよ者ども」と、ひたすら鎌倉への聞えを慮るのである。卷九、寿永三年正月十三日、東国より頼朝の軍勢数万騎、木曾が狼籍追討のため、すでに美濃・伊勢国に着くと聞く義仲に、ただ大きな驚ろきしかないのも、決して彼の愚しさのためばかりではない。根本的に、運命共同体への素朴な信頼が、その行動を支える情熱であり、この崩壊こそ運命の苛酷を告知する第一の基盤に他ならなかったのである。義仲にとって源氏はこうして悲劇の絆となった。

(2) 父義賢の死。

義仲の父義賢は鎌倉恵源太義平に斬られた。「吾妻鑑」は次の如く記す。

義賢、去久寿二年八月、於武蔵国大食館^一。為鎌倉恵源太義平主、被^二討亡^三。于^レ時義仲為三歲嬰兒也。

「百練抄」は久寿二年八月廿九日の条に

近日、風聞云。去十六日。前帶刀長源義賢與^二兄子源義平^一於^二武蔵国^一合戦。

即ち兄子と明記している。兄子源義平は人も知る源頼朝の長兄にあたる。父を頼朝の兄に斬られて失った。父を討った者が他でもない頼朝の兄弟であった事実は、わずか二歳（「吾妻鑑」三才）の彼の生涯にとって切り棄て得ない運命の重圧となった。「保元平治」で繰り返された同族討という暗黒の葛藤——おそらく源氏に生を受けた者の共に背負わねばならぬ暗さとして彼等の脳裡につきまとったであろう——この暗黒を、生年二歳の義仲もまた刻印されて、己が波瀾の境涯の出発点に立つ。「源平盛衰記」は卷二十六に同じ事件を次の如く語る。

父が討れる時、木曾は二歳、名をば駒王丸と云、恵源太は義賢を討つて京上しけるが、畠山庄司重能に云置けるは、駒王をも尋出

して必害すべし、生残りては後患るべしと。⁽³⁾〔木曾謀叛事〕

時に武蔵国に下つていた斎藤別当実盛は、義仲を母に抱かせて次の如く嘆息を漏らす。

東国と云は皆源氏の家人也。惣に養置て討たれども無_レ憑_二甲斐_一、討せじとせんも身の煩たるべし、免も角も難_レ叶_一。(同前)

この間の事状は諸本様々で、とりわけ畠山庄司重能、斎藤別当実盛の両者には物語の後半で成人した義仲をめぐって伝説が多い。注(3)に補記した如くである。今、論旨は事件や現象の伝本諸相に問題を移すのではなく、覚一本平家に鮮明な造型を遂げている義仲の人間像が背負って立つ全貌——その空気が如何に暗色に塗り潰されたものであるかを理解したい。(1)に洞察したように平家に対する源氏でありつつ、否それ以前に源氏嫡系の義朝一族に追われねばならぬ不遇の身であり「東国と云は皆源氏の家人也」が彼にとって否定的意義を有していた点に留意したのである。以上の経歴を踏まえて、起こるべくして起ったのが頼朝との不和である。第七巻頭、「清水冠者」で事件を次のように語り出す。

寿永二年三月上旬に、兵衛佐と木曾冠者義仲、不快の事ありけり。兵衛佐木曾追討のために其勢十萬余で信濃国へ発向す。

以下「覚一本」系のこの項の叙述は極めて簡潔である。頼朝の側からは何の根拠も示されない。当面の原因は恐らく義仲の陳述に見える如く、当時頼朝と不和にあった行家の振舞いに拠っているであろう。⁽⁴⁾「盛衰記」はここに一言の説明を加えている。

今井四郎兼平が儀には、兵衛佐殿と終に御中よかるまじ、故帶刀先生殿をば、悪源太殿討給ぬ、意趣定て御座らんと佐殿も思召らん。(卷二十八、「頼朝義仲中悪事」)

これらの事実を踏まえて「覚一本」は單刀直入「不快のことあり。」「追討のた発向す」と展開していると考えられ

る。かかる個別の理由の明示を越えて、「覚一本」が漸新にも全く触れようとしなかったように、そこには義仲にとって有無を云わせぬ運命の迫りがあった。二十年の昔、上野国一国に勢力を張って父義賢が義平に討たれたと同じケースで、今日信濃北陸七ヶ国を率いんとした彼への同族の迫りとして全く興味深い事実ではなからうか。しかも運命への代償は、いずれの場合にも大きくかつ空虚である。嫡子清水冠者義重生年十一才を頼朝の元へつかわし、つかの間の和平が成立する。鎌倉へ人質の如く連れ去られる吾が子を、彼がいかに深く愛しかつ案じたかは、この少年に四人の「聞ゆる兵共」をつけていることによっても知られる。⁽⁵⁾十ヶ月の後、この人質すら何の役目をも果さぬ対敵関係において両者が出合うのはしかして一定のことであつた。代償は大いなる徒勞と化し、義仲がまのあたり見たこの徒勞空無だけが再びより明確なかたちで彼に己が運命の苛酷を告知したのであらう。運命の迫りの重層と、代償の莫大な徒勞空無こそ、まさに義仲悲劇をその外郭から規制する特質に他ならないのである。

註(1) 清盛の人間像の特質については、別に論文をまとめる予定である。ここでは敢えて触れない。

(2) 例えば寿永二年七月廿八日、北陸より入京した日の蓮花王院御所での二人は次の如くであつた。

彼兩人相並、敢不_レ前後_一、爭極意趣以_レ之可_レ知、

「爭極意趣以_レ之可_レ知」と見えた両者の關係が四ヶ月の後の閏十月廿七日

其不和之緒者、義仲向_二関東_一之間、可_二相伴_一之由触_二行家_一、行家辭遁之間、日来頗不快之上、此兩人三日殊以_レ嗽々、然間行家米月朔日必定下向、義仲又為_レ不_レ被_レ奪_二其功_一於行家、相具可_二下向_一之由風聞云々、

と既に両者は「其功」をめぐる明かに対峙する。かつて頼朝との不和を招く原因ともなつた行象の存在が今や義仲をして孤立へと追いやるのである。

(3) 畠山庄司重能とその弟小山田別当有重兩人の「平家物語」中での位置は諸本によりかなり異なる。一族が関東にあつて源氏に与力する中で、卷九平氏一門の都落ちまで両者の悲痛な平氏への仕候が続くが、特に卷七篠原合戦における描写は勇壮である。「源平盛衰記」は恐らくこの合戦における義仲と畠山兄弟の対敵を踏えて、二歳の義仲が、その生命を託されつつ

畠山の温情により信濃へのがれるきつかけを得た因縁を虚構したのであろう。但し、斎藤別当実盛が、同じ説話群に属しつつ、巻七の死において独立した一章を形成するのに比し、畠山―義仲の因縁は「盛衰記」にあっても再び物語を形成しない。二歳の義仲が今井の手に渡る前に畠山―実盛という経路を経ているとする記事が単に「盛衰記」一本の増補虚構か否かについては決定し得ない。

(4) 註(2)に触れたように、頼朝と反目の結果信濃に義仲を訪ねる行家を義仲が保護したことが当面の原因であろう。

(5) 岩波大系本「平家物語」下 六二頁頭注七に異説。

二

(1)(2)で義仲の境遇を運命づけた輪郭を規定した。いいかえればそれは彼への外からの迫りである。そこで次に外からの迫りを受けて立ち、又自ら外郭へと働きかけて生きた一人の人間の内的な全貌を捉えようと思う。但し云うまでもなく一個の人間における外郭からの迫りと内面的な人格の型とは二者それぞれに分離してあるものではなく、一個の人格の型態とは、究極のところ、彼に与えられたところの運命的なものと、彼が生起せしめた現象との綜合によってのみその全貌が明らかにされ得るのである。

(3) 義仲の人間像の全貌は存在の明快さにおいて捉えられる。端的な否定と肯定とは、その人格の中軸に巢食って自己の破滅への傾斜に参加する。しかも破滅へのめりは凡そ苦悩の姿勢で推進されたのではない。破滅への自由を己が精神の明快なる決断において選び取っていく、たぐいまれな個性を賦与されていたのである。かかる自由な精神こそ木曾義仲の個性のすべてである。義仲人間像の魅力の源泉はここに尽きるであろう。以下この点について、先に引用の本文に従って例証する。

其時義仲二歳なりしを母なくしかかへて信濃へこえ木曾中三兼遠がもとにゆき、

二歳の彼をその懷に母が信濃の山を越えた時、彼の性格は決せられたと見てよい。ここにて「ちからも世にすぐれてつよく、心ならびなく甲なりけり」を得、「ありがたきつよ弓、勢兵、馬の上かちだち」すべて上古の数々の武將をしのぐ資質を与えられた。それは単に肉体的条件ばかりではなく「心もならびなく甲なりけり」に示されやがて「今一日も早く平家を攻落したとえば日本国ふたりの將軍といはればや」と謀叛の発起に連なる心の資質をも意味した。力と心が彼にもたらしたものは「信濃一国の兵もの共なびかぬ草木もなかりけり」に始まる勢力圏の拡大である。支配は越後の国から越中・加賀・能登・越前へと進出し、その間に横田河原合戦、俱利伽羅落、篠原合戦が展開する。とりわけ俱利伽羅落に代表される彼の戦略の巧妙は、ただその目的のために鍛え上げた兼遠廿有余年の成果をまのあたりに見る如くである。例えば俱利伽羅落成功の翌日、彼は「今は思ふ事なし。たゞし十郎藏人殿の志保のいくさこそおぼつかない。いざゆひてみん。」と精銳二万余騎をよりすぐって能登に向っている。しかもその合戦は、

五月廿一日午の剋草もゆるがず照る日に我おとらじとたたかへば、遍身より汗出て水を流すに異ならず。

に端的に示されているように、盛夏白昼の角逐のダイナミックな激動を有しているのである。恐らくかかる激動とそれを支える心情は、行動によって自らの存在を証する動乱期の武士の典型に至りえているであらう。しかも行動の起点は明快である。逆に捉えるなら、思惟が行動を追うのに必死である姿勢が、彼の明快さの由縁ですらある。彼が廿有余年信濃で体得した自由な奔放な内的衝動が、この姿勢の明快さを約束したと考えられる。高木市之助博士は、英雄詩の中心原理を英國の C. M. BOURA の説を引かれて次の如く規定されるが、⁽¹⁾ 義仲が山奥からひきさげて来た精神はまさにこの原理に耐え得る。

英雄詩の中心原理——それはその偉人が、自らの偉らさを証拠立てる為に或る試練を経なくてはならないということであり、試練とは殆ど必然的に或る烈しい行動でしかなく、そこに勇氣や忍耐や、冒險が要るばかりでなく、それが命がけの行動なだけにどんなに永い年月を費して彼の名譽を勝ち得るだけの準備をしなければならぬかという事が分るのだと。

命がけの行動こそ、彼をして英雄の列に並ばしめる名譽を負うにふさわしい。「どんなに永い年月を費して」彼もまたその名譽を勝ち得たことか。

しかるに彼は、入洛の後も尚、思惟が行動を追う明快さ、自由で奔放な内的衝動から、逆に自由でありえなかった。ここに彼の本質規定がなされると考えられる。京に入ってもなお、信濃の山々が彼に植えつけたものから、全く自由でありえなかったその精神の揺がぬ本質は、かくして同時に、ひとたび自分を信濃のままなる姿勢に立ち戻らせる限り何時、何処でも一切への全き自由を呼吸しえたのである。かの清盛が、自己をしばしば政治的配慮の中で窒息させて、窒息がそのまま巨大な戯画として演じられ、巨大な戯画のうえに自らを葬らねばならなかったのに比し、義仲は終生、信濃から自由でありえないことによって逆に信濃の精神への自由を、換言すれば行動の明快さを維持したのであった。「猫間」「提判官」の見事な戯画化もここに由来する。説話はあらためて引用するまでもないが、

木曾の左馬頭、都の守護してありけるが、たちの振舞の無骨さ、物いふ詞づきのかたくななることかぎりなし。ことほりかな二歳より信濃国木曾といふ山里に三十まですみなれたりしかば争かするべき。(巻八「猫間」)

と評するように、そうした戯画化は明らかに無骨さに着眼したものである。しかも作者が「ことほりかな」と述べるように、当時の都の貴族達が義仲のうちに見出したのは、偏に信濃の精神から、自由でない義仲像にすぎなかったのである。沈滞した京洛の陳腐な固定概念でもって器用に説話化し画一化しえたかに見えたものは、終生信濃から、自由でなかったところの、いわば義仲像の半面に過ぎなかったのである。当時の人々が、彼の何ものにも囚われぬ自由に

奔放に行動しえる心身を理解しえなかったのは、けだし当然であろう。「素朴な、単純な、いくぶんお人好の田舎者の人情」「反貴族的な人間性⁽³⁾」という規定もここに着目したものであろう。「田舎者」とされ「反貴族」とうたわれつつ、信濃なる心身への自由を貫いて、やがてそれは破壊のエネルギー、破滅への明快なる決断として彼の生涯を規制するのである。

続いて京都での義仲を諸事件との交錯の中で捉えよう。入京のちに遭遇した二つの事件は皇位継承問題と行家との不和である。皇位継承事件とは、安徳天皇を擁しての平氏都落ち以降、立太子選考をめぐる後白河院との対立である。物語では七月廿八日入京にすぐ続いて八月五日、高倉院の第四親王を院の御意向により立てるべく定められている。即位の儀式は同じ廿日閑院殿にて開かれた。これに反し、義仲が推挙したのは、似仁王の御子で、北国にあった一名還俗宮と呼ばれる親王であった。⁽³⁾入京後、院及び公卿間で占めた位置が、全く最初から孤立的であらねばならなかった理由は、先ずこの強引な主張に求められる。物語では義仲の強引な主張を直接写していないが、例えば四の宮の決定に際して述べられる占の言葉などそれへの配慮であろう。⁽⁴⁾「玉葉」はこの事件をかなり詳細に記録している。入京後の彼の挙動に見る孤立と無謀と対立を支配したであろう彼の内面の実態を捉えるために、この事件での主張と敗北が、自由な精神にいかにか打撃を与え、かつその抵抗の姿勢をいかに煽り立てたかを考える上に重要な契機を提供していると考えられるから、いま少し兼実の記録に触れておく必要がある。「玉葉」で践祚の人選が記事に上るのは八月六日からである。

泰経云踐祚事、高倉院宮二人之間、思食煩之處、以外大事出來了、義仲今日申云、故三条宮御息宮在北陸、義兵之勲功在彼宮御力、仍於立王事二者、不可有異議之由所存也云々、(八月十四日記事)

この日義仲は俊堯僧正を通して再び同様の申出をする。

粗事之理^ニ法皇御隠居之刻、高倉院怒^ニ權臣^一、如^レ無^ニ成敗^一、三条宮依^ニ至孝^一亡^ニ其身^一争^ニ不思^一食^一忘^ニ其孝^一哉、猶此事難^レ散^ニ其
 鬱^一、

続いて十八日の記録に

立王事、義仲猶鬱申云々、此事先始以^ニ高倉院兩宮被^レト之處、(略)然間、義仲推^ニ拳北陸宮^一、

と見える。十八日の記事は十四日の記事の整理であるが、特に北陸宮推拳のため二度目の占でもって第一に四宮、第二に三宮、第三に常に不快として北陸宮が出された旨記している。しかしこの占形を聞く義仲にとって、ただ左の如き返答があるのみであつた。

申云、先以^ニ北陸宮可^レ被^レ立^ニ第一之處、被^レ立^ニ第三無^レ謂^一、

事態の経過が問われるのでなく常に己が意図の前に裸で直面している彼の主張は、やがて廿日、いよいよ立皇の日を迎えて大忿怒の態をぶちまける他なかつたらしい。

先次第之立様、甚以不当也、依^ニ御歳次第者、(略)然而一昨日重遣^ニ御使^一、数遍往還、怒申^下可^レ在^ニ御定^一之由仍其後一決云々、

主張は常に明快である。主張の明快さが院や摂政及左右大臣の前での存在を明快たらしめる。兼実が「以外大事出来了」と云い、義仲への定使僧正俊堯が「数遍往還」したように両者間の対立はきわ立ち、加えて時の関白・摂政・左大臣たる基房・基通・経宗すらが「但武士之所^レ申、不可^レ不^レ怒」⁽⁵⁾と語った院側⁽⁶⁾の空気もこの間の事状を明らかに伝えている。かくして義仲排斥、頼朝への征夷大將軍の院宣へと物語は展開するのであるが、ここで注目すべきは、この期をもとにそのレジスタンス一偏向と不信の思念がいかに強められたかであろう。彼の不当非法な都での振舞が「玉葉」にもこれを堺に連ねられ、院の御領押領⁽⁷⁾が次々と記されてゆく。いわゆる青田刈に代表される悪行である。

「平家物語」もこうした行状を奢逸の悪行として描いている。が、かの鼓判官に見るように悪行は尚その行為の底に悪そのものを感じさせるのではなく、その底に自由な義仲の息吹が横溢するのを見事に伝えている。

たとへば都の守護してあらんものが、馬一足つかうてのらざるべきか。いくらもある田どもからせて、ま草にせんをあながちに法皇のことがめ給ふべき様やある。兵糖米もなければ、冠者原共がかたほとりにつて時々いりどりせんは、何かあながちひが事ならん。(巻八「鼓判官」)

しかもこの息吹きがそのまま破滅へののめりを推し進める。以下これに続いて「今度は義仲が最後の軍にてあらむずるぞ」と行動に移行する。彼の自由な資質が、自らに許容して来た内的衝動が、なぜ破滅への自由を語り、決意して選び取られた破滅への快感を伴うか、この一行の台詞はきわめて明快であろう。軍は法住寺合戦へと移行し、戦勝は卿相雲客四十九人の解任となって結果する。あたかも自らの首を絞めるが如く、四方からの孤立の中に踊り出る姿の中に、けだし真に自己の心情にのみ忠実であらんとした血の通った生命力を感じずにはおれないであろう。囚われない精神において自らを英雄の位置に立たしめ、究極では破滅だけが、その英雄なる資質を証しする悲劇の主人公と云わねばなるまい。

註(1) 岩波講座、日本文学史第一巻、古代Ⅰ所収「英雄の物語」五頁参照

(2) 「義仲・義経」小松茂人《国文学》第三巻第十号所載)五一頁参照

(3) 巻四「通乗之沙汰」に登場、別名「木曾宮」「野依宮」と記さる。

(4) 巻八「山門御幸」「内々御占ありしにも『四の宮位につかせ給ひては、百王まで日本国の御めしたるべし』とぞかんがへける。

(5) 「王葉」巻三十八寿永二年八月廿日項。「僧正俊堯、木曾之定使也」、と割註あり。同月十四日の条には「俊堯僧正、與義仲一為親昵之故」、とあり。「同年十一月十九日法住寺合戦にて悲業の死を遂げた時の天台坐主明雲大僧正の跡を受けて、十二

月十日天台座主に補任。翌年一月義仲の敗北と共に座主の位を落つ。村上源氏顯仲五男。「尊卑分脉」及び「天台座主記」参照。但し俊堯が如何に義仲に接近したかは不明。在位三十日間、山門大衆に用いられなかったのは、けだし当然である。

(6) 「玉葉」 寿永二年八月十八日項参照。

(7) 「玉葉」 寿永二年九月三日より京中の狼籍を嘆ずる記事続出。五日「義仲院御領已下併押領、日々陪増」とあり。

三

木曾義仲の死を描いて「平家物語」は新しい抒情の世界を戦記文芸の中に導入する。冒頭引用の一文から、その(4)に相当する部分、即ち「兼遠うけとってかひくしう廿余年養育す」に集約される彼の運命こそその導入を可能にするモメントである。母が子を抱いて木曾中三兼遠のもとに越えたとき、かの古来「平家」中の絶唱とうたわれた木曾最後の感動は約束されたと見ることが出来る。兼遠の子今井四郎兼平を、所謂乳母子としてここに与えられるのである。兼平は義仲の終生の伴侶であり、竹馬の友となった。そしてそれ以上に「平家物語」は兼平を、ひたすら義仲の死を飾るべく、終生共にある恩愛そのものとして描き切るのである。

義経軍勢が入京する日、兼平は瀬多に陣を構え、京では河原まで攻め入った敵軍の中にあつて義仲は、涙をながいて「かかるべしとだに知りたりせば、今井を勢はやらざらまし。幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なんとこそ契しに、とところどころでうたれん事こそかなしけれ。今井がゆくゑをきかばや」(巻九「河原合戦」)

と鴨河を馬打ち渡す。行動の快感に酔いしれて来た一人の英雄が、運命の迫りを前に一脈の友愛に己が存在のすべてを投げかけようとする。「死なば一所で死なんとこそ」——このありきたりの一文が、かほど切実に心情を吹き込め

られて語られる例を、われわれは他に容易に見出すことは出来ない。こうした「契り」こそ兩人の奏する友愛のリズムを可能とする核心に他ならない。しかも、かつての日本の文芸に、かかる二つの心情を、リリズムへと昇華せしめた姿を未だ見出すことは出来なかったのである。以下もう少し詳察する。今井四郎兼平も、

旗をばまかせて主のおぼつかなきに、宮こへとってかへすほどに、大津のうちの浜にて、木曾殿にゆきあひたてまつる。互にか一町ばかりよりそれとみしって主従駒をはやめてよりあふたり

義仲は、周知の如く、入京以来、自己の行動と周囲の現実との断落にたえず直面して来ている。が、今や彼の行動は決して裏切られることのない核心に触れて展開されるのである。「主のおぼつかなきに」この一言が「契り」の深さを確証している。語りは大津の浜での対面を前に、「去年信濃を出しには五万余騎と聞えしに、けふ四宮河原をすぐるには主従七騎になりけり。まして中有の旅の空おもひやられて哀也。」と彼が前途への全く否定的な架空のビジョンを結ぶが、かかる現世否定の絶望的な中有への旅立ちのビジョンに包まれた中から、作者は、いま再び両者の対面を「主従駒を早めてありあふたり」と、凡そ限界状況だけが賦与しうるであろう愛の絶対の視覚化へと魂を傾けるのである。それは釈明を拒絶する言語の塊り。いわば一言の叙事に傾投されたる愛のビジョンと呼ばれるにふさわしい。人間と人間が心と心と呼び合うに至るまでには、いかに苛酷の歴史と運命を、燃え上る自由の精神で生き抜いて来なければならないか。「恩愛の契」―この「平家物語」の人間像の中心を形象する精神は、木曾義仲の末路を通して見事に具象化されるのである。しかも「平家」は決して説明によって語ろうとはしない。互に中一町ばかりを隔てて、それと見知って寄り合う駒という即物的な描写のうちに愛のビジョンを二重映しに投射しているのである。重厚な運命の迫りと強烈な内的衝動に耐えて来た一個の人格の全貌が、歴史の回転のまっただ中に位置して、自己を至深の愛そのものとして投げかける。いわば至深の心情もまた、義仲の人間像においてはじめて全き明快なる存在へと

具現され得たと考えられよう。

二人の対面は、「木曾殿今井が手をとって」と述べられ義仲は「なんちがゆくへの恋しさに」と語る。兼平「御行えのおぼつかなきに」と答える。義仲は精気を取り戻し、「契はいまだくちざりけり」と続ける。二台のコントラストの胸の底打つ共鳴にたとえられようか。しかも作者がこの共鳴がいかにダイナミックに形象されることを願ったかは、最後の合戦への必然的な盛り上り「今井が旗をさしあげたり」によって理解される。六千余騎を目前に、落武者三百騎を配して、打死を決意する義仲の最後を、華やかなその日の装束で飾る。それは一切の感傷を拒絶する悲愴の美の形象と呼ばれるにふさわしい世界である。そこにはおそらく相手の同情や共感のモメントを一切拒絶して一つの死を、否、亡びの全貌に立ち向わされた作者が存在すると考えられる。かの「一門都落」に綴られた情緒連綿たる、巻七の感傷的抒情性の質を突き破って、「亡び」の非情の現実を、ここに描き上げる。それには先ず、何よりも、すでに考察して来た如く、義仲の人間像が、如何にそうした非情の詩的形象に耐えうる運命と迫力とを秘めるものであるかを確認する必要があったのである。落ちゆく平氏への哀感が豊かな感傷の物語を組み込んだ巻七と、まさにその主謀者である義仲の、巻九での没落は、「平家」十二巻の圧倒的中心部にあつて、「盛者必衰」をまざまざと再現する。しかも、両者の間によこたわるいわゆる抒情性の質の相異は、とりもなおさず「平家物語」の、物語から叙事詩的性格への高揚を伝えてはいはしないだろうか。いまここで巻七を、その質と主題において分析しえないのは残念であるが、義仲像に論点を据える限り、即ち、彼の人間像が不要の同情を拒否する姿勢においてたえず舞台の正面に踊り出るといふ資質によって一層その叙事詩的高揚を可能としたと考えるのである。例えば「源平闘諍録」に見る「木曾於瀬田被討事」条のいわば「平家」の古態を伝える叙述の中に、覚一本「平家」の骨格がすでに形成されており、逆に表現するなら覚一本及び流布本系統の「木曾最後」に見る「亡び」の質が、古態を大きくはみ出さない特質に

において形象化されている事実を確めるのである。山下宏明氏による「闘諍録」⁽¹⁾翻刻により、先きに引用の一連の義仲の末路を照合すると、

応^{タラマシガハ} 如^ニ可^レ有^レ右^ニ、何^ニ今^ニ井^ニ遣^ニ瀬^ニ田^ニ自^ニ幼^ニ少^ニ有^ニ若^ニ一^ニ事^ニ者^ニ臥^ニ一^ニ所^ニ契^ニ伏^ニ所^ニ々^ニ事^ニ悲^ニ欲^ニ見^ニ今^ニ井^ニ行^ニ柄^ニ

とある如く、義仲論における核心が、かくも素朴に述べられているのを既に見るのである。

然^ル間^ニ義^ニ仲^ニ勢^ニ少^ニ而^ニ難^ニ叶^ニ与^ニ今^ニ井^ニ臥^ニ一^ニ所^ニ契^ニ落^ニ瀬^ニ田^ニ方^ニ一^ニ略^ニ木^ニ曾^ニ有^ニ三^ニ大^ニ津^ニ浜^ニ此^ニ方^ニ云^ニ打^ニ出^ニ浜^ニ所^ニ行^ニ合^ニ今^ニ井^ニ四^ニ郎^ニ今^ニ井^ニ奉^ニ見^ニ木^ニ曾^ニ殿^ニ木^ニ曾^ニ見^ニ今^ニ井^ニ互^ニ懸^ニ目^ニ早^ニ駒^ニ打^ニ寄^ニ言^ニ今^ニ井^ニ殿^ニ然^ニ候^ニ

両人の「契」をその核心に構成せられたかかる義仲伝説が、増補系諸本の最古態と目される伝本が、かく鮮かに姿を浮き出しており、ここを中心に義仲の滅亡は、不要の粉飾を捨象する非情の視点に突き放たれて、その故にこそ曇らぬ明快なる叙事詩的性格を保持し続けるものと考えられる。

「ところどころでうたれんよりもひとところどこそ打死をもせめ」「弓矢とりは年来月来いかなる高名候へども最後の時不覚しつればながき疵にて候なり」——ただひたすら自害をすすめる兼平の言葉は「ひとところ」でと願う義仲の言葉と共に運命の非業の断絶をすら感じさせよう。主従の契りはかくして一切の迫り来る非情の中で、二つの魂がかかわせうるに可能な限りの太い有情の絆として描き出される。だが自然もまた非情であった。

木曾殿は只一騎栗津の松原へかけ給ふが正月廿一日入あひばかりの事なるにうす氷ははったりけり。ふか田ありともしらずして、馬をざつとうち入れたれば、馬のかしらも見えざりけり。あふれどもあふれども、うてどもうてどもはたらかず。今井が行えのおぼつかなさにふりあふぎ給へるうち甲を、三浦の石田次郎為久おっかかってよッびゐてひやうふつとある。(巻九「木曾最後」)

冬の日の薄暮の栗津に、かくして迫りくる非情の命運に抵抗し続けて、己が愛の心情に最後まで忠実に生きえた義仲の、このあふるるばかりの有情の命——この非情の命運と有情の精神の角逐こそ、戦記文芸の底を貫流するリリシズ

ムの特質に他ならぬと考えられる。「平家物語」が叙事詩的性格へと結ばれる詩的特質は、義仲像の造型によって一つの形象へと高揚されているのである。非情と有情の葛藤が止揚する詩情——「平家物語」が義仲の悲劇的人間像に与えた至深の特質と云えよう。⁽⁹⁾

註(1) 未刊国文資料 山下宏明編著「源平闘諍録と研究」一七一頁〜一七八頁参照。

(2) 義仲伝説は「木曾最後」に続いて「樋口被討討」にて完結すると考えねばならない。義仲の死より三日後すなわち一月廿四日、「木曾左馬頭并余党五人が頸、大路をわたさる。樋口次郎は降人なりしが頸に頸のともせんと申ければ、藍擢の水干、立烏帽子でわたされけり。同廿五日、樋口次郎遂に切られぬ」木曾が四天王の一人として今井と並び称せられた樋口の「頸のともせん」の言葉に、義仲 今井の「契」の見事なヴァリエーションがある。しかも、義経らの種々の助令嘆願にもかかわらず、「是をなだめられんは、養虎の愁あるべし」と沙汰ありて、樋口も又有情と非情の葛藤の中にその末路を飾っている。まさに義仲伝説のエピログにふさわしい一章と云えようか。